1

ほとんどを仕事のために棒に振った夏が終わってみると、間髪を入れずにひどく冷たい秋がやってきた。

秋は苦手だった。なぜだかは知らないが心身の機能すべてが低下するような気がする。仕事にも身が入らず、といって遊び呆けようという闘志も湧かない。

今年の久し振りの猛暑は、若者の失踪人の数も増やした。暑い最中にあって、たまらずに海や山、プールに出かけた十代の男女が、人生の予定表に書きこまれていなかった出会いや事件に遭遇し、これも予定にない家出や〝駆けおち〟をすることになる。結果、早川法律事務所調査二課で、若者の失踪人調査を専門業務とする僕は、夏休みも週末も返上することになった。

だからといって、後ろ姿を眺める暇も与えず立ち去ってしまった夏を恨んでみても始まらない。猛暑と青少年の家出の相関関係に留意するのは、僕をのぞけば警察の少年課員ぐらいのものだろう。いや、果たして彼らだってそうしているかどうか、怪しいものだ。

ともあれ、十月の半ばに近い金曜日の晩に、麻布十番の外れにある喫茶店で腰をすえた僕は、決して人生を楽しむ気分ではなかった。喫茶店にいたのは、仕事ではお定まりの張り込みのためだが、その夜に関していえば、お定まりに少しは変化を与えるふたつの要素があった。

ひとつは、現在僕が追っかけている十六歳の少女を連れ戻せば、ほぼふた月ぶりの休みがとれるということ、もうひとつは、寂しくも退屈な張り込みにつきあってくれている、我が長年の友・沢辺だった。

沢辺は、早川法律事務所の所員ではない。それどころか、僕が知る限り、プレイボーイクラブをのぞく、いかなる組織にも属してはいない。身長が百八十五センチあって、横幅もそれにふさわしいだけ張り出している。知りあった十年前は、今よりもう少しほっそりしていたように思う。その頃は早稲田の理工で理論物理学をやっていた。卒業してからは、何もしていない。広尾にある広大なマンションに住み、女と酒とギャンブルとスポーツで、その限りない筈の時間をやりくりしている。遊びだけのために、一日を四十八時間あってくれと願う男だ。いかつい体には似合わないマスクと切れる頭脳を持っている。

彼が、何事によらず、本気になって熱くなるのを、僕はこれまでに数度しか見たことがない。最初にそういう状態になったのが、知りあった渋谷の玉突き屋『R』で十四時間ぶ

追跡者の血統

っ通しのスリークッションの勝負をしたときだった。
以来、多くて三度、もしかすると一度だけかもしれない。
西の方の超大物の御落胤だということだけわかっている。名前をいっても、一般大衆が、あの人か、と頷くような、そんな安手の〝大物〟ではない。たとえば地元出身の閣僚クラスの代議士や、県警の本部長が、なにげなくその名を呟き、その後で慌てて口をおさえたくなる、そういった大物だ。
沢辺がなぜそのまま理論物理学をつづけようとしなかったか、その理由もかつて聞いたような気がする。詳しくは覚えていない。要は、年齢にありがちな、ちょっとしたつっぱりと、物心ついたときからつきあってきた自分の中にあるはぐれ者の習性だろう。
理屈を人生に持ちこむのが嫌いなのだ。理屈で、自分を型に押しこめるくらいなら、理屈ぬきで、思うがままの人生を生きよう、そう決めたのだ。そして、たまたま、それが可能な環境に沢辺はいた。
従って気が向けば、驚くほどつきあいよく、僕の仕事に協力してくれた。十年以上、二十年近く、東京とその周辺の盛り場で硬軟両方の道で遊びつづけてきた彼には、広い顔と、遠くの出来事を聞き分ける耳、人の仮面の向こう側を見通す目があった。
これまで、沢辺のそういった部分にどれほど助けられたか、限りがなかった。そして、それに対し、一度として僕は礼の言葉を述べたこともなく、また求められたこともなかった。

その沢辺が小さく刻んだチーズケーキのひとかけらを口に放りこんで唸った。
「たるいぜ。乗りこんでいったら、どうなんだ？」
濃紺のだっぷりしたセーターをTシャツの上につけ、コーデュロイのパンツにブーツをはいている。セーターは、ひと目でわかるハンドメイドだ。それが、沢辺の呼び出しを待って、片ときも電話のそばを離れないような、憐れな女の子からの貢ぎ物であることは明らかだ。
「こっちは警官じゃない。シカトされても文句もいえない。ぶん殴られても以下同文だ」
僕は肩をすくめて答えた。
「利口な奴のやる商売じゃねえな」
沢辺は首を振った。
「そのセーター、きっと電話機の前で編んだんだろうな」
「何の話だ」
「おぬしの毒牙にかかった、憐れな女の子さ。遊ばれているとも知らないで、せっせと編んだのだろう」
「これはちがう。自分の女から貰ったセーターを着て歩くほど、俺は悪趣味じゃない。それにだ、俺の周辺の女たちは、遊んでいるつもりで俺とつきあっちゃいても――」
沢辺がやんわりと抗議をしかけたときだった。喫茶店の向かいに建つマンションから、早足で男女が現われた。女は、ワンピースにポシェットをかけ、男は、ジーンズにカウチ

ンセーターをつけている。

僕は沢辺に目配せした。沢辺が伝票をつかんだ。払いを彼に任せ、先に喫茶店を出る。

男女は、麻布十番の通りを六本木に向かって歩いていた。

後ろ姿を見ていても女の子の方が高校生であることははっきりわかる。男の方は二十二、三歳、確か半年前まで渋谷のディスコでウエイターをしていた筈だ。彼女は一年ほど前に、初めて、そのディスコに足を踏み入れている。中学時代の同級生に連れていかれたのだ。

その同級生は、幾度かの補導の末、通っていた私立高校を退学になった。補導の理由は、万引と恐喝、そして売春だった。前を行くウエイターとは、中学二年の頃から肉体関係があった、と僕にいった。

僕は、二人の後について芋洗い坂を登っていった。女の子の方が家を出たのが、二週間前、化粧の濃いことと、髪の毛を染めたことをなじられ、ひと月前にも家出をしている。そのときは、三日間の外泊ののちに帰宅した。どこにいたかは、両親に問い詰められても答えなかった。

二週間前、彼女が学校に出かけている間に両親が勉強机の中を調べた。カセットテープのケースの中に、未使用のコンドームが隠されていた。帰ってきた彼女を、証券会社に勤める父親が無言で殴りつけた。彼女は、その場で制服のまま、家を飛び出した。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。